

縛られて閉じ込められる

～日本の精神病患者の死が明らかにした痛ましい事実

ワシントンポスト2021・6・19



Tied down and locked away: Harrowing tales emerge from Japan's psychiatric patients



A shrine to Keisuke Ohata at his parents' home in Kanazawa, Japan. He died at age 40 after being

金沢発

大畠一也さんは睡眠に問題を抱えており、統合失調症と診断された後、何回か自発的に精神

科で検査を受けた。しかし、40歳の時の2016年の訪問が生きている産後となった。

入院の8日後、彼はベッドに縛られた。その6日後、拘束を解かれたが彼は亡くなった。

彼の両親、父正晴さん70歳、母澄子さん68歳。彼らは少なくとも7回、入院中の息子のところを訪れようとしたが、追い返されたと言う。息子が拘束されていたことを、彼らは決して知らされなかった。そして、息子が入院した2週間後、彼が亡くなったという電話を受けた。

「我々の最大の後悔は、彼に会えなかったことだ」。東京の約180マイル北西にある金沢市内の自宅で正晴さんは言った。「もし私たちが彼に会っていたら、私たちは何が起こっていたかに気づき、何か起こる前に彼を家に連れて帰っていただろう」。

日本には、世間の目が届かないところで長い間運営してきた巨大な精神科産業がある。しかし、元患者や親族が被害を受けたことを進んで訴えるようになってきているため、長期化する監禁・身体拘束への過度の依存、そして残酷な治療の話が明るみに出てきている。

「日本では、精神科産業は大きな力を持っている。」と杏林大学の精神医療の教授であり、日本のほか3か国における精神科病棟の広がりについての新しい研究の著者である長谷川利夫氏は言った。「しかし、遂に私たちは人々がこのことについてオープンに話ができる段階に来た」。

メンタルヘルスに対するタブーが蔓延している日本

長谷川氏の研究は、この分野では初めて『疫学と精神医学的科学的科学』に掲載された。日本の精神病患者は、アメリカの患者の約270倍身体拘束されやすく、オーストラリアの600倍、ニュージーランドの3,200倍であることがわかった。

多くの国がここ数十年で、地域に根差したメンタルヘルスケアや新しい治療の使用に向けて動いたが、日本は逆の方向に行くと長谷川氏は言う。日本は、精神科の患者のための病院のベッドを大量に増やすことに関わった、そしてそのベッドは病院の利益のために埋められる必要があるのだ。

研修を受けた医療スタッフの不足もまた、例えば患者が自分自身や他の人に危険を引き起こさないとしても、病院が腰・手首・足首のところで縛られた患者を、より多くベッドに拘束することに依存したままにしていると、長谷川氏は言う。

何日もの間、続けて身体を動かさないでいると、患者は長距離のフライトの乗客が罹ってし

もう“エコノミークラス症候群”として時に知られる、深部静脈血栓症のリスクを高める。

自殺率の高さに悩まされ、メンタルヘルスに関するタブーが蔓延している日本において、今回の調査結果は、日本の精神科患者にとって厳しい状況を示している。多くの人が、どこにも行き場がないと感じるのも驚きではない。

双極性障害を患っていたニュージーランド出身のひとりの英語教師が、日本で10日間ベッドに縛りつけられた後に死亡した2017年、日本のメンタルヘルスのシステムは国際的な注目を浴びた。読売新聞は、ここ4年間だけでも日本で身体拘束されたことから引き起こされた47の死亡例を報告している。

長谷川氏は、日本の11の病院への調査では、ベッドに縛りつけられた患者は、平均96日間そのまま放置されていたことを示している、と語った。厚生労働省の調査では、ある男性が15年間もの間拘束されていたということも判明した。

裁判所の判定は3520万円の損害賠償

統合失調症患者である大畠さんのケースでは、病院は最初彼が心不全で亡くなったと語った。両親が依頼した別の検死結果では、彼は強く拘束された後に深部静脈血栓症を発症していたことが判明した。

2020年、画期的判決において、名古屋高等裁判所は損害賠償として家族に3,520万円(32万ドル)を支払うよう命じ、その拘束が“違法”だと結論付けた。日本の裁判所がそのような判決を出したのは初めてのことである。そしてその病院は、日本精神科病院協会の支援を受けて、その決定を争っている。

日本精神科病院協会会長の山崎学氏は、彼は、身体拘束がほとんどのケースで適切に行われていると信じていると語り、ほとんどの問題は、協会に所属していない約300の病院で起こったのだと主張している。彼は大畠家の勝利が、病院が裁判に持ち込まれることを恐れて特定の患者を拒むことにつながり得ると心配していると語った。

「我々は、長い目で見ればそのことはより危険だと考えている」と彼は語った。

OECDの統計によると、2016年日本には33万4,000以上の精神病床があった。それは世界全体の5分の1であり、人口はアメリカの半分より少ないと思われるのにアメリカの5倍の多さである。日本精神科病院協会の山崎氏によると、日本の精神科病床の定義は他国に比べて広いそうだ。

強い医師は、家族が対処するのが難しい患者についての決定を下す。そして、その人が一旦入院してしまうと、退院させることはなかなか難しくなる。

45 年間監禁されていた時男さん

伊藤時男さんは、一旦精神病院の中に入ると、逃げ出すことがいかに難しいかを知っている。彼は健康だと感じていたにもかかわらず、約 45 年間閉じ込められ、そして運命の幸運ないたずらによってのみ解放されたのである。現在、彼は彼から人生を奪ったとして政府を訴えている。

彼の母は彼が若い時に亡くなり、継母は彼を決して受け入れなかった、と伊藤さんは語った。ティーンエイジャーの時、彼は、日本の皇室と関係があるという妄想を経験し始めた。

16 歳で彼は、東京の精神病院に監禁された。彼は、彼を失神させる注射を頻繁に受けたと言う。スタッフは、ちょっとした言い訳でも、罰の一つの形として患者に電気ショックを与えた。

彼は試しに 2 度脱出しようとしたが、連れ戻された。

5 年後、彼は日本の東北にある福島県の病院に移された。カウンセリングはなかったが、彼の薬は徐々に減らされ、そして 20 代の初めには彼は外の世界に復帰する準備ができたと感じた。

「最初、私は退院させて欲しいと頼んだが、すぐにそれは不可能なのだとわかり、お願いするのを辞めてしまった」と彼は言う。伊藤さんは、それからの 40 年、病院の壁の向こう側で過ごした。

伊藤さんの状況を唯一変えたのは、2011 年日本の海岸を襲い彼の病院を破壊した地震と津波だった。

彼は別の病院に移送されたが、医師たちは遂に彼を解放した。61 歳で、彼は別の世界と出会った。

「退院後、私は完全に迷子だった」。「私は、ATM を見たことも使ったこともなく、電車の切符の買い方も分からなかった。そして、携帯電話さえ使ったことがなかった」、と彼は言った。

年に一度の父の訪問以外、伊藤さんは監禁されていた間、ほとんど完全に孤立していた。継

母と義理の兄弟が初めて彼を訪れたのは、父の葬式の2年後であり、その時初めて父が亡くなっていたことが分かった。

「私の入院後、彼女は私が退院することにいつも反対した」と彼は言った。「しかし家族に怒っても意味がない」。

伊藤さんは、(病院)内の生活は「孤独を乗り越えていた」と言う。彼は、毎日絵を描くことでなんとか生きていた、と語った。彼の最大の後悔は、結婚して彼自身の家族を持つ機会がなかったことだと。

「病院はお金が全てだった」と彼は言う。「そこに(入院して)いたすべての患者について、病院は政府から年に500万円(4万5,000ドル)を受け取っていた。私は、そこに連れてこられ、最終的に46年間収容されたホームレスの男性のケースを知っている」。

伊藤さんは、政策の失敗を理由に、政府に損害賠償として3,300万円(30万ドル)を要求している。しかし、彼の訴訟の主な目的は、彼が言う不当に施設内に収容されている多くの他の人々を解放することである。

「私は、私がしたようにその人たちに社会に戻ってほしい」。